

ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト

赤松林太郎

♪ 4

オーストリア・ウィーン



40歳を超えてパリに再び住みたいという夢が捨てきれず、昨年2月、思い切って1カ月近くの休暇を取りました。東京・羽田からパリへの直行便があまりに快適で、留学時代の苦勞が他人事のように感じられたくらいです。

パリではアパルトマンを借りてしばらく滞在した後、スペインに渡り、地中海に面した都市アリカントでマスタークラスをして、マドリッドからオーストリア・ウィーンに飛びました。

パリでは極めて独創的に生きる若者たちと、アリカントでは楽器代理店をわずか5年で大きく発展させた創業者と、マドリッドではスペイン・ハプスブルク家の栄枯に触れ、ウィーンではロンドンで投資会社を経営するバンカーや東京の広告代理店社長と食事を共にしました。それぞれの目で見た世界の動向を語ってもらい、明日を読む力を少しだけ分けけていただきました。

病魔が去った喜びに共感



ウィーン国立歌劇場で開催された「蝶々夫人」公演のカーテンコール(2020年2月29日、いずれも赤松林太郎さん提供)

パリでは治安の悪化ばかりが気になりましたが、2月も最終週に差し掛かる頃には新型コロナウイルスの話で持ち切りに。ウィーンでは3日間をわたり国際コンクールの審査員を務めました。最終日には北イタリアからの参加者

は国境をまたげず、感染を恐れてコンクール出場を辞退する人も出ました。

世の中が一変するのに3日も必要としない、というのを実感したわけですが、その1週間後に北イタリアで感染が急増し、間もなく

ヨーロッパ全域そして世界が恐怖に覆われることになるとは誰も思わなかったことでしょう。

ウィーンでの最後の夜、私は国立歌劇場でブッチーニの「蝶々夫人」を観劇しました。このオペラは徹頭徹尾蝶々さんの物語なので、サエ・キユン・リムの好演が全てでした。彼女が演じる蝶々さんはトスカと重なり、人種や時代が違えども同じ女性であり、かつ同じ作曲家から生み出されたヒロインなのだと思えられます。

このオペラは1951年のミラノ・スカラ座公演以来、ウィーン国立歌劇場でも半世紀以上にわたって藤田嗣治の舞台美術で知られています。ヨーロッパの劇場が違和感なく歌舞伎の雰囲気及早替わり

して、長崎を舞台としたブッチーニの世界観を作り出した「フジタ」の至芸。

藤田の回想録の中で、20年代にパリ・オペラ座からの舞台美術の依頼を断ったことが述べられています。金銭的な理由からとはいえず、このことを後年まで「若気のあやまち」と悔いているのが、私の心に響いています。私自身も藤田と同じく異邦人としてパリに住んだ者の一人。

ウィーンをたった3月1日は曇り時々晴れ。これまで何の共感もなく通り過ぎていたグラーパーン通りのペスト記念柱ですが、ヨーロッパ全域から病魔が去った時の喜びや安堵や感謝がいかほどのものだったか、今なら理解できます。

◇第2月曜に掲載します。



ウィーン・グラーパーン通りのペスト記念柱(2020年)



あかまつ・りんたろう 1978年、大分県生まれ。2歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。洗足学園音楽大客員教授、大阪音楽大特任准教授。神戸市在住。

